

監修：矢萩大輔 (有)人事・労務 代表取締役  
無料農業支援ポータルサイト  
「われらまちの農縁団」  
<http://social-jinji-roumu.com/farming/>

今回の  
執筆者 **矢尾板 初美**



(有)人事・労務パートナー行政書士 / 903シティファーム推進協議会委員長。明治学院大学国際学部卒業後、総合物流会社を経て行政書士として独立。法人設立や事務局サポートなどコミュニティ創りを支援している。2020年より東京浅草でコミュニティカフェをスタートさせた。

## 農業経営でも生成AIでもその前に

今回のキャスト ① 藤田 匠、② 西園寺 千代

新しく定期開催されるマルシェのPRが生成AIで作られていることを知った藤田社長。自社でもAI活用を考えているのだが。

藤田 千代ちゃん、ChatGPTって使ったことある？

千代 いえ、聞いたことはありますけど。どこまでできるか懐疑的に思いつつ、興味はあります。

藤田 ほら、これを見て。今度隣町で定期開催することになったマルシェのWebページなんですけど。千代 「このマルシェは、食の作り手と知り合うことを目的としたマルシェで...」。コンセプトがはっきりしていてわかりやすいですね。画像も両手いっぱい色とりどりの野菜と果物を抱えていて、にぎやかな雰囲気伝わってきます。このページがどうしたんですか？

藤田 実はこれ、文章はChatGPTで、トップの画像も画像生成AIで作ったんだって。文章は最後の仕上げを人の手で修正しているらしいけど。それを今朝のマルシェの説明会で聞いて、もうびっくりしちゃってます。

千代 そうだったんですね、びっくりです。違和感がない。私はこんなに良い文章を書ける自信ありません。

藤田 僕もAIつてものを甘く見てたな。事業に使うようになるのは遠い先の未来かな。でも、案外使い方は難しくありません。

### 生成系AIを活用するためのリスク管理

いま、ChatGPTをはじめとする生成系AIのビジネスへの活用が話題になっています。利用者が指定する条件に従ったうえで必要な情報をアウトプットしてくれるため、上手く活用すれば、今まで時間を掛けて収集し取りまとめた情報が数分で完結するかもしれません。そうなれば、より効率的に業務が進められるということに注目を浴びています。

しい。ぜひうちでも導入したいな。文章やイラストは苦手だから、諦めたり後回しにしていたものもたくさんあるからさ。

千代 確かにそうですね。Webページも新しくしたいし、直接購入のお客さんへのお礼やお知らせのニュースレターも定期配信できるし、メルマガだってできちゃう。難しそうなイメージがあっただけ、もし簡単にできるなら導入してみたいですね。

藤田 そうそう、導入するうえで、いくつか注意点があるらしい。セキュリティなど安全に配慮するためにも、ルールを守って使用しないとね。

様々な業界で人手不足が深刻とされている現代社会において、AIが得意とする業務、人間が得意とする業務を適材適所で振り分け、活用することにより人手不足の緩和・解消とすることが期待されます。現在、すでに活用している会社または活用を検討している会社は、6割超にのぼるとの調査もあります。今後もAIの活用はますます広まっていくでしょう。

これら生成系AIは日々の業務において無制限に使用しても大丈夫なのでどうか。業務に利用することで、社内・社外でトラブルになることはないのでしょうか。様々な場面を想定してのリスク管理は必要になるでしょうか。

## 最終的な意思決定は人がする

### 1 プライバシーとの関係性

不特定多数の人が使用するAIツールは、大量の情報を学習し、利用者に大きな恩恵をもたらすというメリットがあります。一方で、不用意にAIに学習させてしまうと、その情報は同じく不特定多数の利用者に学習結果として利用されることとなります。

ここで注意しないといけないのは、個人情報、未公開情報またはそれにつながる情報をAIに入力しないようにすることです。個人が特定されない一般的・抽象的な使用に限定しておく必要があるでしょう。

不用意に個人情報を入力してしまうと、その入力した内容をもとにAIが学習し、別の利用者の質問に対して、回答としてその情報が出力されてしまう危険性ははら

んでいます。

### 2 情報リテラシーと情報モラル

AIの利用に限った話ではありませんが、利用者の情報リテラシー・情報モラルは必要です。

通常のインターネット検索においてもそうですが、AIが出力した内容をそのまま鵜呑みにすると、さらには、そのまま利用することは危険です。出力した情報が本当に正しいものなのか、周囲への配慮に欠けた内容となっていないか、最終的には利用者自身によるチェックは必須です。

### 3 著作権著作物との関係性

こちらも特に注意を払わなければなりません。いま利用されているAIがどのような学習経路をたどっているかは見えない部分が多いですが、インターネット上に出回っている情報や有名な書籍等の情報など、一般的に見たり聞いたりすることが多い情報はすでに学習されている可能性が高いと思われます。

すなわち、AIから出力される内容がこういった、すでに世の中に出回っている著作物と類似している可能性があるということになります。

利用者自身が著作権を侵害するつもりがなくても、結果的に著作権を侵害していたということが起こりうる危険性があります。

だからこそ、AIの出力内容そのまま利用するのではなく、最終的には利用者目線で確認しておくことが必要になります。それぞれのツールの利用規約に沿って利用しましょう。

### 4 判断をAIに頼らない

全てをAIに任せきりにすることは危険です。なぜなら、AIの思考回路が現時点ではブラックボックス化しているためです。学習元がはっきりしていれば、それに類似する思考を行なっているだろうと推測はできますが、まだまだ詳細は未知の領域。

いざ何か問題が発生したときに「AIが考えたことだから分かりません」というわけにはいきません。最終的な意思決定は、人がする必要があります。

### 5 AI利用時に参考資料として

#### 明記することは必要か

明記することを推奨します。③でも記載しましたが、AIで出力される内容は基本的にどこかで学

習された情報です。現時点においても、参考書籍等の引用の際には明示することが必須であることを考えますと、AIだからといって記載しなくて良いと考えるのはリスクであると思います。

## AIを活用するときにやっつけいけない

このようにAIは、高い利便性をもつ反面、様々なリスクも同時にはらんでいるものです。そのため、このようなツールを利用する際には、リスクを抑えるための制限を設ける必要性があります。AI利用時の禁止事項として下記の点は押さえておいてください。

- プライバシーに関わる情報の入力の禁止
- AIの回答をそのまま情報発信することは禁止（絶対的に検証が必要）
- 専門家の意見（や診断等）が必要にも関わらず、それを経ずに生成系AIで出力された情報を利用すること
- それぞれのツールの利用規約に違反する利用行為

これらを踏まえて、ぜひとも皆さんの事業の効率化と発展へ、活用してもらえればと思います。